W 52-3
F 67
1

14500

大越文庫藏書印

うつくしみ給ふ。安倍の
みちの国にまかりくだる
ものを。なほ、かくかこと
をそへてなげきあへり。
かくて、ものの心ばへ
ものあはれなるに、
ものの心ばへ
ものあはれなる人
なりけり。
ものの心ばへ
ものあはれなる人
なりけり。
ものの心ばへ
ものあはれなる人
なりけり。

如今こゝをいかなる所とか思ふらん
なほむかしのなごりはあまたあれど
ゆくすゑ遠き世の水ぐき
川の上に浮る舟
乃ちよりて
雲ゐまでさすがにとまりをうしなふ
なほ行末はしれる
月の道をしる人
のなかりせば
いかでかはこゝまでも
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも
なほいかばかりかはるわきまへなりあるべき
こゝまでも

かくのごとくの道理を
見聞する事あらせしかば
あるひは
こゝろ
ゝ
ゝ
ゝ

人とすらうこのことをしらんかなしらんかなかの月日のすぎゆくこと
はしらにあらずいまの人今をいにしへにおもひなすなり
古人のこゝろをしらんにあらずこゝろをあらためずしてあやまりなかるべし
ゆゑなしとせず
このみちをよくこゝろをあきらめ高古をあきらめむ
とすれば世の人をあつまるべきなり世のうつりかはるこゝろをしらんこゝろ
ありとせば何ぞ
かくあらむかまことに三代をへやまとうたの道
なり道をふれうん人こゝろを得ん人
一形をわの変ちらはの中に師伝をうけ
新乃抄とせりかさしよりこゝろ
若貝和香書奥書
寛永十二

たるくめたまあり○今陰陽(ヨウ)世界を陽とし
一私云○詩毛詩にあり○里言なれはをあらはしてもあり
如字ハ言なるもの○師の
只傳ふるなり○又里言とて○いかなる人乃
くちをかりてつたへたるなり○又毛義
をうるへきる詩○毛詩にあり○乃里言をつまびらかにするり○
一私云○詩のうたをかうんをはるる○師説三
自序例ものたるこうを意乃ぶんをくゝ
ゝ○又於ものの詩のうたるかうん乃意乃ものより
加乃○又ものの序後宮をこと詩のうたるを持を
詩ものうたるこうを定ものの例あるものの三具

拾遺愚草

一和歌○同集○[illegible]詞[illegible]八雲言葉○又[illegible]奇

引歌ゝ○句のうらを点をなをくらしをわうし口傳

乃初月てるらきてるる○

一和歌○師説つ○月約束おろかなる者員あり○くゝりゝ者員

初月[illegible]ゝ[illegible]ゝて俳のおもよりすてつゝ

ゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

里言　今の世うたうたひ人のつるはひ
あつまり詞乃てをはひ
かたり文字　らりるれろ
乃五つをいふ　　ゑまきり　蚊又めまき
かたり詞　ゆくうらうらと
るとをいふ
又かたりよりしめやかに物名乃例　たとり沼すると
とをいふ
○
挿頭かさし　裝ひ　脚結あゆひ
挿頭
かさし
挿
裝
脚
名
脚
裝
脚
名
脚
裝
脚
名
脚

かぎり物上

不畫谷氏口傳

門人　吉川彦富
山口高端　筆受

あれ

あれ古語拾遺曰阿波礼言天晴也これ目つけて今まで
ありくりくい古言かぎりに尺する故なり異名ど上古ハ
ものゝおもかなるうり古今ものゝあはれ拾遺序
ものゝ上ものゝおもかなるうり古今ものゝあはれ拾遺序
乃作者ものゝよりうれしき事あるもせよいかさんとすれ
事をもせよいかさんとすれ必ずしもよろこぶ感して
うちなげきうる詞也言ふ

ちはまもばあはれるもの

知恵で今めかしまよひあるまじきなれば外の感情を
引いぶ[illegible]て昔をもとひもきをもかれ
一をもとりてこころをもちひやり面をむかへをもとりをぶ
三れ[あれ]といへてをれけり昔をもとひてるハ
思ニ八セビ
あるかもしへありきてへとイフ人まろうそいうれ何ヨリモ
千
かろかしやともよりけりあいれるもとりてるかきこのをとる所
テミニフタツギヤ
ゆくさきをこうねてるい
テミニフタ思ニ八セビ
拾秋
かろもれ、風うて今ねあいるわうこのよれ字コレホド
ヒヤサテ
吹ちりそれ
新
あるいなくなきかすそ世中まあいれいまノ月まてるゆん
ウジ
アヽサテ
一をもとりてこころをとりていわれハ
拾秋
つよりもあはきれ月をそてあれ
思ニ八セビ
ひきやとる

彩あさいなの（アサヰナノ）ゆふ霧のこなたなる秋風（ルデアラウ）ぬれぬ袖（テレニラ）をこの原

面をたつくりををしかの八

古 ちはやぶる（チヤヤラ）神の宮（ダマデヒラウ）人乃高風（ルワイ）ぬれぬ袖（テレニラタマデヤ）あさけ（アサケ）いくよの宮（ヨホド）

萩風を風すなりあれ秋（ナンデモ）ふる成ら（コウヲ）

思二八ゥ

いづまきもかいひとつる又句乃ふみよ亀（思二八ゥ）

をうけるまありこれ乃末

拾 あつまちぬ乃高まを（コヲ）きてあれ乃秋を乃（ヲ）水

思二八ゥ

あつぬれ（思二八ゥ）といふ詞をまつるめ迄

ぐつの世よ（思二八ゥ）あつぬれ（思二八ゥ）といふ詞をはづまりて乃上へまりて乃ぐ乃中

いろ乃迄今里よ（思二八ゥ）あつぬれ（思二八ゥ）といふるぶ又新りと古（思二八ゥ）と

とつ詞ハかざまりあらぶ・ゆあり濡ぶべ乃所

あハ

俚言ニあらまあるものハとゝハかハとゝハかゝるまゝ今ハ
ゝるかるるゝ也カとあとのわれも
ハかれかの
ハあハあれあのハめのまゝ今
ハ今めのみゆるものをゝハ
ぬものをもいつり但ゝぐれなんぬ人がゝれみんぬ時
ゝもあしかゝ也時とゝもいゝ
ゝ多ぐひ公ゝ如ゝくかゝゝ
乃べし

あハ

あハらまあハ物アチニアハ
ハてゝとゝるかよみタ月乃ちゝ絶ゝよひ和かゝ
こゝ多ゝ乃ゝとあハとみゝてテリニ有モハ
あれ

ある

古語拾遺ニ曰古語ニ事之裏切皆称ニ阿那俚ニ云

あらう　行　るどいへ何なるり

秋の月なまあきたてるり女郎花あるかオヤカシ　かまし花も一とき

あるらひ行てやんまつのまつ今もあるそよう嵐

いとこいとこ　るどもまきをいづ皆めのうな

おまもそいらうあるいか我なあるりて也故よ古い

痛乃ぶをあるとよまるもう目はいきを小町集よあるな

め腹のいきを深氏あれるとなるもなるど又里

よあるあつやもあやと　や　りどをくるていく公昔よかれり

黄かるぞうけあをらいいてどよる　あ　すどをつけう

あるあいく気の見やもしも波乃うきねるど

あまり　よあり

あまり　里言同又　あんまり（アンニリ）ともよろしからぬ　ルヤウニナルコトカ　ともよろしからぬ

あいくさ　偽　あんまりくさ　命乃あまりあくして　来日　つくり　別　ぬ　ふる

偽　命乃あまりあくして来日つくり別ぬふる

きるふる　又

あまり　里言　又　あんまり（アンニリ）ともよろしからぬ　ルヤウニナルコトカ　ともよろしからぬ

ドノヤウニ　ドウニアル
くるよいかろうやうまハ　ハツナフ
ある事ハ　アニ
あまり久しくて　かぐ
つるを搔ぐ　あきよ
を掘ぐ　ろ
あまり久しくて　かぐ
つるを搔ぐ　あきよ
を掘ぐ　ろ
やうよりあるなり　俚言　あんまり　うれさ
るぞつよ
用

あやよ　俚言　ふりぎて　るぎるやうめつてよ　るぞつよかなう
事理乃分別せぬ也　万葉乃時代なれ　ぬ
文よ　ハめもあやなりとも　かくり　の
ハ　ナゼヤラメツタニ　タヾカ有タホドニ
ふりぬ　ありもの　ふ　二村山もこそ　えす成　テミモタゴ有
ヤ　チヨトシタ　ヤ　フシギニ　チヤニヨツテ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

あやあく　俚言　いづわるく　といふ　ふ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
見つまく　度乃よりこそ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

オナニトセウ
うこせん あるなのやおくの（アラ イヂワル）
秋と（ヱニサヘ）まつすまんと思ふ（ギヤニ サテモ）の（イヂワル）けをさそあやしくくるようの衣れ

いうう いうを いのなる ゆのふて

いうて いうてう いうてく いうそう いうそう

いうう

里言 どうう どうう あと（ヒ）の祖母わうかおいすでま

変宮をしうるとをかりまらうぶはとひそ人のよりめうる

のあり

古 枯見よ山のこれのうつろふ人乃こうろもいつくとそ（ドウカ コヽハ）ぬよ

後 あらぬ乃ひらもこそあれ松山乃波ののいそ（テシニラ ドウカ）いつてなるらん（デコロリ）

これ

るう

とうてあれば まこと のみ きの みえる 四也

声コレホド
カくあるものまれなる人をいうつとおっしゃるべき
ズニ井ラレウヅ
板
うるむもうすもいうあるまいよりもうるはきく人をうかがうべき
トウニア　ハカラロ
古
うらまあるる波のたつをあるいうさるる花とみるん
チヤニヨッテドウニア　ズニ井ヨウヅ
板
なるき名をとくまいらひてあるぬべいのうらうへいうらうん
スマシテシニハレルガ　ドウニア　ウヅ
みるいうやうにおぼきりまたべきをうけり
ドウニア
世中いうつはせまりたけ山のまきの板のまきうたるの
ウモノゾ　サヘテ
千
ひかりまうたひうるおちぶいうはもるるまの関のり
ドウニアコレハ　ルハヅゾ
いうるる
二例あり一例下るか又はぬぎきりべきをうけるる
カ
どのやうに
とぞ里ぶべ
人は何とおっうぞ酒の
ドウニアコレハ
いううぞ
とうるあぐひなり

古 あ[illegible]りの山へまをれ出[illegible]れいりよ（ドヤウニ）ものとうとう[illegible]る[illegible]問る[illegible]（イヅ）

扨 ま[illegible]つ（テカヒナリニ）ひとりぬかよの海[illegible]ま[illegible]いりよ久（ドヤウニ）き物と[illegible]か知。（ゾイ）

古 世中[illegible]いつ（ドノヤウニ）まよ[illegible]るとと[illegible]今（デアラウソ）こ[illegible]ら（コレホドオホク）ん人[illegible]う[illegible]ん[illegible]ら[illegible]れ（レルホドニ）

扨 [illegible]こうを長月（ナリテ）と[illegible]ん[illegible]ま[illegible]いりよ別（ドヤウニ）の[illegible]る[illegible]か[illegible]ま（ウモノゾ）

二例 [illegible]ひ[illegible]ぐ[illegible]き[illegible]こ[illegible]うぢや と書て

古 [illegible]こ人いりよ（ドウヂヤ）と[illegible]と[illegible]山へ[illegible]（サニ）れぬ[illegible]ぬ[illegible]わ[illegible]ま[illegible]れ[illegible]と[illegible]て[illegible]全

扨 [illegible]ま[illegible]ものあ[illegible]ま[illegible]ぬ[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]（タガアルドウヂヤ）[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]（タガ有カ）[illegible]わ

三二例 自問自答[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]

扨 [illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]（ドウヂヤ）[illegible]ま[illegible]ま[illegible]（ナモノヂヤ）[illegible]

扨 [illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]（ドウヂヤ）[illegible]ま[illegible]ま[illegible]（イナア）[illegible]ま[illegible]ま[illegible]（メヤウニシテイ）[illegible]

ぢ [illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[

ゆ・ゆ・し例文ふ・ゆ・ゆ・ごろより後ふ・音のみ文ゆ
みえぬ例あり・又いうよゆんハ何とせうぞゆ・実よまんく
をしらぬゆ・いうぜゆんハどうせうふいるりかとよりとうく
りあるまじきこるをこれがどうせうゆ・とかりようこがひるゆ
古 とうをかるこるん人をいうせゆんハ（ドウセウニハ）あるまちるゆ・ゆ・ゆ・

古 何トヤウニアラカ いのなんいとうの中まする世なりまこと乃ん
ジダラバ
ナンダ タツタ
投 あきの時いうなりしかとて今月ねたいひき
ドノヤウニアツタ イヅ
月 かつらなりあけぬとうの月いるるかいるとうの月はなうん
デ ドノヤウニシタレバ 小テ京
カ

いとうねて

うとうびねびひの二例あり・うとうびひの時ハ里とう

何とうねびひの時ハ里とう

何とうぞうて

とうて

古 白雲乃いとうをいとうをちとをいとうて林のとうをちとをひん
ナニトゾシテ ギヤニ ナンデトシテ 小テ京
いとうて高とうまとうん命とうてあとうあとうあとうのなりもとうすれ
サテ ナドモシナモノヂヤ

いとうて

疑乃二例上ハ里とうねびひの時ハ

里とうねびひの時ハ

里とうぞうて

里とうぞうて

ハ大とうまとうとうぞひ

いとうて

いとうて

いとうて

いとうて

せんとうをこまとうとうとう

於 當りこゝろ（イニシテミタラバ）ゆくこゝ思ひ（ドウシテ）まつ（ウモノガ）
後 人々（ダニス）陸奥くまくまきこゝ（ドウシテ）ゆくて（タデクロガ）ん
於 さよりあ（トウゾシテ）くふいくてこゝ思ひ（ドウシテ）つけ（テシニスト）
同 林もまくさ遠くもあらぬ（ナイ）よいくて（ドウゾシテ）かゝ（トカク）ちこゝ（ドウゾシテ）れをつけよやま（ウモノ）

又 いうぞ（ウゾ）

於 いくてもこゝ（ウゾシテ）さこゝ思ひ（ドウシテ）ねぐひ乃倒なり

いくてい

二例上よりあるべし疑の時 どうしてまあと書す於の

時 どうあるとまして

いうで と いうぐ を合てむうべ

於 菊ふれとこゝ思ひ（ドウシテ）ルニイ（ルニイ）をいとりれ山いくて（ドウシテ）ゆうあちこゝ思ひ（ドウシテ）ぐん（タゴロガ）

於 いくてのこゝ思ひ（ドウシテ）バカリ（バカリ）こゝ思ひ乃あるこゝ思ひ（ドウシテ）あるをまくよるさうや（シタイガ）

いくてかく

二例上よりあるべし どうぐひけば どうしてれぐとて と但

さて。彩の時 どうしてまあと 異事 いくで ハを

あいなくて 給べし

秋

そのあり所をわすれん人の心 ドウシタレバトテ 多くなりて 事成るべし ウヂン

ドウシタラバニアラカウ 日ごとに 方尼 とくとくとくとくとまつ なとて デナシニ あらもん ウヂン

いくそうハ

いくそうの 里よ なんぼうねど どれねど いくそうハ

古

いくらぐく すも仏ちり

彩ナシボウホト

いくそうりの 実ハねとすとこの松をよろこ何カハシラズ ひあひうりめる アシニ井戸

ニシテ ニタタラバ

いくそうハ

いくく いくく いくそうハく

いくく 里 言回 いくく ふくと あ也又 偲よ なん回 なん里

とをハ及ハ言

いくく 僅 何ばかり

古 うえぶのやまとかはらのいくくもまさりけり（ハツキリトシタ）

於 あをやぎのいくくもまさりけり（ナニホド）

いくくく 僅 いくばくの猶乃ゆかまをぐいくくにあらんとぞ（ナニホド）

古 めくるはるの道又いくくとおもふくかはらぬやうみのうち（ルモノヲヤ也）

イカホド いくくとはいかに国をつくれるいかにしるとはいくくとさとをあらんよりづ（ヒヨツテ）

いくくて 里 何千何百 いくぐくよりとはまさるの也（ナニホド）

於キモノツフシタリ あるさまりぬまとはいかなるのいくくの人乃かりをさうらん（ダアラウゾ）

伊勢物 あるへいくくるのーゆあいくくて何千何百 ひあきかへるうんとるる今あるまさ（デアラウゾ）

いくくくく 里 何千何百 ばかり といくく いくくて ありかばを

しらぬ也 僅 いくばくの猶乃ゆかまをぐいくくにあらんとぞ里とるる也ゆ百ゆあてつがぎるまで

古花ゝまあらちらし風タ（ヂギニヨツテ）何千何百ホド
いくそたくわうとうぶゝ（ゾ）
いさや

いさゝ　黒土言　さしがうあるかうとい金ゝぬすをといへ答えて
ゝ頭也さて下ゝまゝつゝ沈とうけゝあるとうけめあり
古人ハ（ドウアレカ）きかもしらゝ君とゝ花を何カレバ（ナニガレバ）ひとゝ乃かゝ
ゝ月いのぬうゝのゝ山なるいゝ月川（サレバ）ゝとゝらゝよわゝ君ゝする
いゝゝや　今すゝうらすゝゝいゝゝゝゝをゝゝていゝゝで星ゝ月

何ガドウヤラ　何ぞうやゝゝとらゝゝぐひあり

何ガドウヤラ　ゝちゝわく頭ゝ沈ゝかゝする
河ガドウヤラ　ゝゝゝゝゝゝ波ゝ
ゝゝゝゝゝ（ヌノニ）よゝ（コレガ）金ゝ（ソレデアラウカ）ゝゝ（コレバカリハ）ゝゝ（ヌ）
ゝ

いゝゝ　ゝゝゝゝゝ　ゝゝゝゝゝ　ゝゝゝゝゝ

ごとし。ぜひとも乃字濁点あるべき事なり。

とさらわとよめるまに

後又抄 世中もいとさ

シラヌトモ いとさとも

九

いとさ

墨言 さわとよめる人を

須也又さづくるを

おらてちらす時ハ

ど ちらわ

後 ちるさくの野へみゆるを

オモムキヂヤニ サア トモ

古 かゝみのいとさ

ドリヤ

いさめよ

十

いさめよ

古當ブンイヲニ

いさめよ河ふちまを日ハ

何ガシラズ テシニウ

ふちもをたゝんみえつ

當ブンイヲニ

ぶんとるよ

ちまとる

ふ

ちとる民

ノチヨツトデニ
さてめよ吹風ハかなひくべきまうをとこ
大和
又百姓ふまるまづらつくるを見人はきめよかうそうをもんをも
つくりなめハとよあるをとゝ帖すくいきめ代とのをとり
大抵うをあとをいなるをうをとらるまづ
祖の猶ずるもの

いとゝ

いとゝ事ハ代頂上ハいうるなり里ハいうとも

收
いとのうをひをとれをいかうとさもいけの魚を祝ハかとゝ
於ドチノ方へ
いつくするとうハこうまを柳乃ひとをいかうをめなをこ乃ら後を

いつく

事ハ代頂上ハすりもすべ絶ゝる

古
かゝをまをハとゝをいくをめをとをとゝをいくをきをいとゝ

於ありあけの月のひかりをまつ程（ウチ）よりはせのいくさ（キツウ）かなぶ（テモタフカナ）るる

いろ〳〵

むざと

無益なる事也。里よ

むざと

無益なる事

とよむ。いろ〳〵

とよむ。いろ〳〵

拾集

古コレホド

かくさりをとらをとらをとら

いつの

しさの

ぞ

り来へまりて

例なり。但うけがなる時は

いつぞ

と書べし

古 ちやの池乃義をもはり山わたるまつ（テレニフタヲチヤガ）

扶 あいそもはなくられぬ。いつ。むの

はづ いつゞとも。ちの沢のあめめ

分ノイナシニ

ぞつくとも。ねられる何カロメテ

いつり

二例あり。一例つゝ乃、杉ぐらいつゆ

うんなどする。

今 いつ乃まぐろ

まぐろ

いつ乃まぐ

るぞ

古 ちやの（カラ）今（ヤカテ）うんとぬ

扶 杉ぐらいつゆ

何モカヤノズ（トタカク）（バフロリ）

ちやの

ちわるぬ（ハヅチヤ）

（テシニフタヲニ）（イツノフゾ）

杉ぐらめるをいつゞ乃梅ちやもさるうん（イテクレヨ）

いつ乃。又ぬをとめるいちとゆぐ。

あり

抄
いつとてあらそみたいそまちとりあとはなることはあるまふ（イフカナ）
抄
あまちゆくぶらつてあけてらするとも又
いつとなく君ふとしひこ（ク）れをいのりはあみそ（何カシラズ）
見もらいでうるつこるなや（テ進ゼル）
いはしの宮まはよあるを返ハ宮まる
まぶろしとまつ
いのまつ屋と
新続古
イツノ一ニヤラ
いつとかはみよくるるとき（テシラフメーデヤナア）
玉
イツノ冬ニヤラ
いつ冬はまきまうゆくあるみえまて（ホド）
いつ
里
いつかはみちらまもこすれりやり（シテクレ）
里
いつかはみちらまもこすれりやり（シテクレ）
又
いつとてもいよ
抄
あまとあるやりはいつもなとりみあらるてやん（ウ）
イツカサテモ
いつとてもあるまるあをるんつしなまこ乃ふるうん（ヨウ）
イツカサテモ
同

色もていふうまのうまのめるを　はなよりぐ

風ふく　乃ゑまも同うう

いつ（イツノ　ヤニヤラ）　色かはみはけしみよりのやまこゑるとは　ゆるもけるよ（キエモセヌニ）

いたり（イツノ　ヤニヤラ）　色うすめるを　ゆきうれしてよのれのまを　ゆあをな（テシニフタイノウチ　ニデアル　タツタ　ウチ）

宝家集

いつこ　いつく　いつら　いつれ　いつ

いつく

いつ　ぶつ　ぶつこ　ぶつく　ぶつと　ぶつか　ぶつば　ぶつを　ぶつ

いつ　ぶつ　ぶつこ　ぶつく　ぶつと　ぶつか　ぶつば　ぶつを　ぶつ

といふ何處乃ゑるり　いつく　ハ里ふり

といふ何國乃ゑもさ　ハ　ハ

古文書　ぶつ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

ぶつ　ハ

古ドウ云トコロ いつくあつまをいはとりんぐ何ヨリモ なりまさるまつよりぐ
アラウハゾ
ほ みちのくらいつくらあれ何ト云トコロ ちあれ 塩かまのうらこそ
なみたつつるてかなも サモ

又 馬内侍集より いづこ とあるかぎりしら いづこ なるも

人うけ 里云ハ いろ なをたぶめふる也

いづら 里 ぐら とつる いづらゆく いづらなるぐすあり。又 ハ

づら ぐらゆくるもも ぐらゆくるひとをいふこころなり

古 さこそ ねなほちひをれ ゆくるをそ ちゆくらん
デアロゾ
ムリナカ サケモ ゆくも ゆくもはめて こうをいちやく ちゆくらん
カナ ドチヘ ツタラ ウゾ
ハ ゆ みちちるを ちてはて ルモノヂヤガ ちはやぶる ちなるらん
ドチヘ チヤモノテアロゾ

又 ぐ ぐ とつ

古 ちまよ ぐ ぐ とつ
テシモ ヂヤ ドル ウモゾ
ちまよ ちて ちて ちまて

拾 夏ごとうぐひすもなくなるまでにかくれてきくあつしなるかな

みわ

古 花より先人にあらはしなるよりいつまでをさきはなにうつるとも

拾 君をのみ思ひなるわの袖にはいつまでかこの物思ふをそへてしるべき

さべてふるなどふるより

いつまでの里よ

拾 あをやぎのいとよりそへておるをいつまでかこの山風ぞきる

拾 つねなれぬいつまでかはるかなるいつまでかをかりきつるかな

いつまで里

古 ぬぎてよそいつまでとはいつまでかあるうちにあれやいくかなるうとやいく

人のいとそれたる家にかりまする日
夕雲のいとすきまなくつゝとたちとりつゝ
いとゝ風情ある家とこそ
ウモノゾ
古 風ふくかとさそひもてこめぬ
ドチノ方
とうぶ
いつくまなくゆらんかをまきまとはれぬるまとうみ
デアラウヲ
いているわ
二例あり。一例はうつくしらふ洞の上まおりがかゝる
見物をきもぬかあり。古ハ此例をみんてうぼり
上 又 やあらんとうらぶかるゝ洞なり
古 サヤニ 神をくゝめてもかゝるゝ
テハシナ
二例ぶ里ものかはゆ
ボツ
おいてくれぬるどうふ知ぬ代

八代集抄

枯(オケル)て人をとゝのゝ(何カ)ゝ風ふきて波のうち花をいて(イテ)てゝ(テウド通リ)の波むさゝ(タデ蓼)ゝ岩をこゝかいずまてわが心をもて人のゝ今すべきゝを人のゝ知れい極こゝ知るべ行古のかゝ和文三ゝくり

ゝ例のゝをばゝゝいゝ分なりゝ見ゝえて文ゝだゝやゝと今ゝ

ゝゝ例のゝをばゝゝいゝ分なりゝ見ゝえて文ゝだゝやゝと今ゝ

ゝゝゝ

古 かりそめの おれば（イヤしテハナイ）ものを 乗りの 枝（イヤ）
枝 さらるもの とかも いるの（イヤ）ものを ものを さらを もめや（ウカヤ）

又 上の帖に 敬人の つまもとよめる 心 ぞ
とりの ものなり

いる をつくり 生 り いる と
古 ものを つくり 生 り いる と
ものを 思ふ ものを（ハツカリ） 分 ば いる（イヤ）
ものを ものを（フイイ） 思ひ ものを

生 会 ハ 二 枝 より つば げて ら ぐ ら ハ ら で ら ぐ ら
二 ら ハ 一 だ ら と い ま ら て ら ら ば ら る ら ら ら ら ら

古 ら ら ら ら ら

タヾ廿

ゆくすえまでかからんそのあまのけぶりは

又

ゆくすえまでかからんそのあまのけぶり

ユヲアルニ

サレハセテ

ものおもへばいとゞあまのそでのうらにしほたれてのちはいとゞなみたのうきこそまさりけれ

何カシラズ

ウラノモノヲ

ルモノヲ

ものおもへばいとゞあまのそでのうらにしほたれてのちはいとゞなみたのうきこそまさりけれ

二拾

ものおもへばかりよ

ゆくすえまでかからんそのあまのけぶり

と偽てこゝろ

ゆくすえまでかからんそのあまのけぶり

と

ゆくすえまでかからんそのあまのけぶり

と

ゆくすえまでかからんそのあまのけぶり

と

タヾサへ　色りそめうつろふ　ものは　今波かな
仮　いまは　いまは　いまは　いまは　いまは

いまは　四句あり　一例にかなるべし

とゝくの人　今はいまは　とゝくの人　今

のゝ　よつぎ　きて　時里　をつゞめて　まと　とゝくの人　今

すゝ　とゝ　四句例　すゝ

古　うすゝ　のゝ　とゝ　ゝ　ゝ　

をぐ[illegible]とを[illegible]のよハわ[illegible]なゞて[illegible]
山例[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

いとゝ家乃ちくさ人なよ（全ロ）やゝ（デアラウカ）むらさき色

四例ハ 今より とゝ べき を 今とゝ めて る也 ぽ ゝ よ これ う

とゝ

於 秋ゝ（ヤウニ）くさ の ゝ ゝ ゝ

二例

古 今ゴロハ しらなんやらひるまを（ウモノヂヤニ）あはんとを（向カヒテ）ぬ（タ）事を（向カヒテ）命（デウタ）なりける（ヒヂヤ）

返 多つ川いろにしるしるてしらるるかな（何モ今ゴロハ）

三位ぞ

これやさらむ

るもゝいつ今ハ乃公今ゝの

秋るゝ

ものゝ（フモノヂヤ）ゆ

くさゆをりをりすり

古 花乃木も今ハ（コレカラハ）ゝ（イ）春ゝ

はゝ（モハヤサラバ）いまゝとて（今テ）

いまゝ

ぞ（テンニウタラ）わるゝ

ものゝ（フモノヂヤ）

ゝ（方）

ゝ

ゝ

ゝ

まるべきもしかくつぎきてうゐ初めかきゆめよりはるかに別れ尺を置云

れ今とかりて又とうゐ初めり

古又於 ハヌデハナケレド 今トナリテ又
ひとりともなるものうらいまうこしたきまうてをつ・我ら成ん少

故今トナリテ又 ルヘイ テノヒナリニ
いまはなるかへ見れみつよときうもとつこうを今

いまゝ

いまぐ

古 イニモツテ リモセヌニ ニヘドロニ
うゑ月かくし恨いまうゐうかくよこう祈てうつ木の枯

於 多後カラ 自分ノ コチヤ イニダニ
みゝ月沉ひまうをあをよりまうゐ松乃ひとそ物ひまうゐ

古 ニダ ニダ
梅のえまゐ屋ま、かけひくゝ物ひとともいまうゐ雪ふ春りの

同 ニダル ニテクレ
ものいまうゐ物ひとうゐ花橘ほ山ほやとふかうなむ

初乃二首ふみ分不乃宮をうけ恵ぶ末乃ふるの石ゐり

後乃三首のごとき、うせをかなれと、[物]とよあると同

[物]ぬよりハ、[物]乃條下みこうく沒ぶ

いとりし

いはね

里三首

[いはぐら]へ[いはよ]るどぐ[ぐ]ぶ[ぶ]ぶ[ぶ]かのまうりもやうも

古

あ[あ]ぶ[ぶ]りまをまをまてもりりまいや遠さるる和歌かの形也

ハ

あるし侍て[て]ものりいやかウ人色るる[る]ま物乃塔ル

いはよ

[いはよ]ま[ま]ま[ま]ま[ま]の名也古今[今]よ[よ]ハ[ハ]

[いはよ]と[と]も

よ[よ]りいはまま[ま]ま[ま]ま[ま]

うち

うちつけて　うちそへて

畢言

とうと　ちちめと　るとして河事をあれば

と志いづくてふく思ふる事なくぬ仲也ぬ

ばすちわくふとくべきくべをきりてもくふりちあぶ

うちるるとくべなれぬりてよくるるよあくぶくと

わくいとづくるなくるるり

古

へくあ一ぬ新りすいちれるしてくりはよくくてに

後

秘閣乃ちるくか　チヨトヤ　ドレニモ　チヨトナド　テニモテクヨ

ヨト　ちすくくと　ヤ　ギヤヅ　デアラウ　ヅギヤ

本

春くれ山田乃ちりくとけそくくて後くて全くて後くて

ちよと　とうと　ちくと河乃河ちくびくくのよくくび

ゑうるりぶくろ
ぐあひ
ひらくとる
りうぶくろ
ぐあひ
ひらくとる
りうぶくろ
ぐあひ
ひらくとる
りう

白ユキガケニ うちつけに花の色をこそうばはめ

日アテズンヒニ あつしけれとも あるうかみちくもぬ なきやとはり文 ウアルモノヂヤ

文てうちつけめとも 又公のさしるめ風 うちつけはとも

かりに里よ めはるる とくに宮すも

廿二 梅の色をまちくめ風 三ナ うちつけに

ちくと同よみえ初一会 こヂヤ

まてはるるき なり 理をきいもる

うらくへて 里 るぐいと るぐいて るどいて まくへぐ るぐまを

縄るどをありけしらのづて 雪まる色くうあるる雪

るむ むとびぐるどかを うらくへと

もり

廿二

屏風乃為なる花をうめる

古 世紀ゆめ（タ）はゆ（カラ）ちいうちく（ナガク）て世、ゑ（ギャラ）わ行ひるは

るうるかつ（置タ）るいとの（ウチヅイテ）くとうひやわらん（ウカ）

うくて

うくて 黒三云 えれもるゑ とうあり 冠まうて

あきこてのくつゆとうる ゆあり

廿三

古 ちもてみうく なるまあを（スヘサレルヲチヤノニ）梅もうて（エンレモナイ）神ゆとまれる（ビ井ル）

（ソヤ ソハドノヤウニモ）さてゑこてつ

うゑこてやゆのわてやとうせめて（ウヌレエンレモナウ）高ゆうて高こうる

うゑうゑ 黒 ちとのまゑ とつ 但こ井ゆ しゆ ゆ り諸物て

さぐあこうる 詞るり 第言葉すゑ 不くよあり 又遊仙窟よ

二句とも未必乃宮ぬるを　うぐひす　何せむ
第七　ものよりあひしる人ぞうつるも　ゆくすゑ
六番　ものあらぬ　志ものもとづ　るどもしべ　万葉乃詞より
て　ものへで　未當をそ　うぐひす　と八点ぜあ　とゆ　ぞ
ゆ　古今乃かぞ　ゆ　ゆづて　今くらく　いぶ　梅万
葉　ものいふ　れ　うぐひす　もあり　中古　未　うぐひす　を
乃　ものみ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
次　ものゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
調　ものゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ものゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

着時（ヨリツカニ）未必（ウタガタモ）相（ヒトニ）着死（ヒトニ）　又云未必（ウタガタモ）由詩得（ヨリテニエンシニハ）

春の日のひかりとてこそ花の色の
うつろふらめ
春の日のうらゝかなれば花の色の
うつろふらめ
春の日のうらゝかなれば花の色の
うつろふらめ
春の日のうらゝかなれば花の色の
うつろふらめ

拾遺 源氏

春の日のうらゝかなれば花の色の
うつろふらめ

狭衣

春の日のうらゝかなれば花の色の
うつろふらめ

新千

春の日のうらゝかなれば花の色の
うつろふらめ

春の日のうらゝかなれば花の色の
うつろふらめ

春の日のうらゝかなれば花の色の
うつろふらめ

蜻蛉日記よりつゝみ侍りとよばれて蜻蛉
日記よりつゝみ侍りなどをとり侍りなどをとり侍り
源氏蘭とりつゝみよりさしひろげてとり侍るなどかゝり又
新勅撰
わすれをいとゞ世にあるまじうすなはちあるまじ
こゝろしつゝ世をつゞけわるゆゑ思ふ心はいかゞ特
りづをみえずさこゝ紙で意ふめく種をもれで
ぞすゝもあるあるをつゝよく種乃ぬきよりそ
ぬべしとゝむうきぞ
えゝ えゝそ えゝそ えゝそ
えゝ
えゝ
えゝ

なかりしかはゆゑ又ハ
[ゆ]をもとめ[ゆ]
[ゆ]をもとめ[ゆ]
[ゆ]をもとめ[ゆ]

ものがたりをかたるなかにもかくれなきものは
いづれも。星。言葉。
えもいはぬ。えもいはぬ。るどいえ。詞。
ものかたり。
えもいはぬ。えもいはぬ。みづからの詞をいふなり。
今。ものがたりを。星。
上。
よ。香。
ぬ。えもいはぬ。
ものがたりは。
ものがたりは。
ものがたりは

ぎすのなくこゑをきくあ
さのあけぼのにいとゞこゑ
をしぼりてなくなり
古ヨガアケルト あけぬれば
ココデコソト
ゆくへもしらぬ
コヒガ
ゆくへをたにもしらぬ
郭公はきくこゝろ
あて
又
古今よみびとの
よりけるこゝろ
をよめる
問
をさゞめてなくこゑ
なりこゝろ
後世よ
ハ
ものか
なし
ゆ
ゆくへしらぬ
こゝろ
ぬ
何モ
ゆくへもしらぬ
こゝろ
ぬ
ゆくへしらぬ
こゝろ
ぬ
後拾
ゆくへしらぬ
こゝろ
ぬ
ゆくへしらぬ
こゝろ
ぬ
ゆくへしらぬ
こゝろ
ぬ

(450)

+N-5
i-085
Ka.72
1

日本之部

国立国語研究所
1001094687